

文部科学大臣賞

『あの子の向こう側にあるもの』

デュッセルドルフ補習授業校（ドイツ）

中三

杉田^{すぎた}

太朗^{たろう}

（海外滞在年数十四年六ヶ月）

あの子は誰だろう
見たことのない顔だ
少し気になったけど
前を通り過ぎた

あの子は誰だろう
一人でずっといる
少し気になって
ちらりとその顔を見た

そこに一人、また違う子がやって来た
僕は立ち止まり

「やあ、こんにちは」と目くばせした
困ったような笑顔が一瞬浮かんだのを見た

一体誰なんだろう
気が付けば、あの子は「あの子達」になった
耳に入ってくる会話
だけど、何を言っているか分からなかった

ある日先生は言った

「あの子達は、皆えらいぞ」

家族たちと離れ離れでも一日一日を
一生懸命生きているんだぞ」

僕は知った

あの子達は遠い所から
長い時間をかけて、自分の足で
ここまでやって来たんだ

あの子達は知っている

この世界に平等など無い

そして今、自分達の故郷には
帰ることができないことを

僕は見た

あの子が学校の隅で
一人、泣いていたことを

それでも教室で笑顔を作っていることを

あの子達は知っている

僕らが普通に家に帰り
そこには家族が待っていることを

あの子達も帰ることができのかな
また、家族と一緒に過ごせるのかな
あの子達の故郷に平和は来るのかな

朝、またその子とすれ違った
「おはよう」と声をかけると
「おはよう」と元気に言ってくれた
けれどもその子の目の奥には
この世界に対する
悲しみや怒りがくつきりと
映っていた